

外来語「クレーム」の基本語化とその“挫折”

金 愛蘭 (広島大学大学院教育学研究科・国立国語研究所共同研究者) †

Failure of Inclusion of the Loanword "Kurêmu" into Japanese Core Vocabulary

Eran Kim (Hiroshima University, NINJAL)

要旨

発表者は、これまで20世紀後半の新聞コーパスを用いて、現代日本語語彙における「外来語の基本語化」現象の記述とその理論化を試みてきた。本発表では、その一環として外来語「クレーム」に注目する。自作の20世紀後半の通時的新聞コーパスを調査したところ、「クレーム」は1970年以降使われるようになり、1991年ごろまではその使用量を増加させて基本語化に向かうように思われたが、その間も類義語「苦情」「文句」を上回ることはなく、また2000年から2010年にかけては使用量を大きく減らし、結局、その基本語化は“挫折”したように見える。発表では、その要因・背景として、「クレームをつける」という動詞句を媒介としてマイナスの感情的意味が付着した可能性を指摘し、外来語の基本語化をそれに“挫折”した語によってより多角的に把握し得る可能性について述べる。

1. はじめに

日本語の、とくに書きことばの基本語彙については、近代以降のマクロな変化の動向が、ある程度明らかにされている。宮島達夫(1967)は、国立国語研究所の「雑誌90種の語彙調査」(1956年)で得られた上位1000語が歴史上いつごろから使われているかを調べる中で、明治時代には抽象名詞の漢語が、大正・昭和時代には具体名詞の外来語が現れ、増えた可能性があるとした。また、石井正彦(2013)は、上の90種調査と、同じ国語研究所の「月刊雑誌70誌の語彙調査」の結果とを比較し、現在は、それに次ぐ第三の段階として、外来語の抽象名詞が増え、基本語彙の中に進出している時期と考えられるとしている。

こうした基本語彙のマクロな変化は、個々の語が新たに基本語彙の仲間入りをする「基本語化」と、逆に基本語彙から外れる「周辺語化」というミクロな変化をその内実としている。しかし、近現代日本語の大規模な通時コーパスが整備されていない状況では、個別の語の使用の変化動向を明らかにすることは容易ではなく、当然、基本語化・周辺語化した語を特定することも困難であった。基本語化・周辺語化は、基本語彙の変化から当然想定される現象であるが、それを実証することはできなかったのである。

そこで、発表者は、現代語の通時的なコーパスを自ら構築して、個別語の「基本語化」現象を実証的に把握・記述する研究を構想・実践してきた。金愛蘭(2011)は、1950年から2000年までの『毎日新聞』について、10年おきに各年平均200万字を超える大規模な「通時的新聞コーパス」を作成し、その語彙調査に基づいてすべての外来語についてその「増加傾向係数」を算出して、20世紀後半の新聞において基本語化した可能性の高い(抽象的な)外来語を取り出した。また、「トラブル」「ケース」をはじめとするいくつかの外来語について、それぞれの基本語化の過程を、類義語となる和語・漢語との関係をも明ら

† kimeran [at] hirosima-u.ac.jp

かにしながら記述するとともに、それらの基本語化の背景に、現代の新聞文章の概略化傾向がこうした外来語を基本語として必要としているという見方を提示した。

本発表では、上記研究の一環として、外来語「クレーム」に注目する。具体的には、自作の通時的新聞コーパスを資料に、20世紀後半の新聞における「クレーム」とその類義語の使用状況を調査し、得られた用例を検討することによって、「クレーム」の基本語化が“挫折”したことを述べる。また、その“挫折”の要因・背景として、「クレームをつける」という動詞句を媒介としてマイナスの感情的意味が付着した可能性について検討する。

2. 資料—「20世紀後半の通時的新聞コーパス」

調査には、発表者自らが作成した「通時的新聞コーパス」(各年36日分増補版)^{注1}を用いる。同コーパスは、1950年から2010年までの『毎日新聞』から、ほぼ10年おきに、毎月3日分(5日・15日・25日)、各年36日分(全体では252日分)の朝刊全紙面の記事(見出しと本文)を、1950～80年は『縮刷版』からテキスト入力し、1991～2010年については『CD—毎日新聞データ集』から抽出して作成したものである(抽出比率は、約10分の1)。コーパスの規模は、表1(空白は除く)の通り。全体で2,000万字近くとなり、ページ数の極端に少なかった1950年、やや少なかった1960年を除けば、各年ほぼ300万字程度の、20世紀後半(から21世紀初頭)の通時コーパスとしては、個別の語の分析にも耐え得るような規模のコーパスを構築することができた。コーパス設計・作成の詳細については、金愛蘭(2011)を参照されたい。

表1 各年の文字数

年	文字数
1950	793,692
1960	2,208,396
1970	3,183,297
1980	3,218,737
1991	3,265,786
2000	3,994,933
2010	3,119,875
計	19,784,716

3. 外来語「クレーム」とその類義語の量的変動

3.1 類義語の範囲

はじめに、「クレーム」の使用量の変動を調査するが、その際、比較のための類義語として、「苦情」と「文句」の使用量も同時に調査する。金愛蘭(2011)で述べたように、類義語の特定は必ずしも容易ではないが、今回は用例数の多いこの2語に限定し、他の類義語の可能性^{注2}については今後の課題とする。

¹ 「通時的新聞コーパス」の作成にあたっては、(財)博報児童教育振興会「第3回ことばと教育研究助成」と、文部科学省科学研究費補助金「20世紀後半の新聞における外来語の基本語化に関する調査研究」(平成22～23年度・若手研究B・課題番号21720168)および「基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究」(平成24～26年度・若手研究B・課題番号23720241)の交付を受けた。本発表では、金愛蘭(2011)の毎月2日分を3日分に増補し、さらに2010年分も加えたものを用いる。

² たとえば、国語研究所(2004)『分類語彙表 増補改訂版』の「クレーム」と同じ分類・段落番号(1.3135「批評・弁解」の06段落)には、他に「苦情、言い分、申し分、物言い、異議、難癖[～を付ける]、けち、文句、言葉とがめ、ブーイング」がある。

3.2 通時コーパスにおける出現状況

表2に、外来語「クレーム」と類義語「苦情」「文句」の、「通時的新聞コーパス」における出現頻度を示す³。これからわかるように、「クレーム」は1970年以降使われるようになり、2000年ごろまではその使用量を増加させて基本語化に向かうように見えるが、その間も類義語「苦情」「文句」を上回ることなく、また2010年には使用量を大きく減らしている(2010年には「苦情」「文句」も減少するが、その理由は不明)。

図1は、表1の数値を相対頻度(使用率)として構成比棒グラフに表したものであるが、これを見ると、「クレーム」は、1970年から91年にかけてその勢力(類義語に対する割合)を大きくして基本語化する勢いを見せたものの、2000年から2010年にかけてはその割合を減らし、結局、その基本語化は“挫折”したように見える。

表2 通時コーパスにおける「クレーム」と類義語の出現頻度

	50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	計
クレーム	0	0	8 (2.5)	11 (3.4)	9 (2.8)	18 (4.5)	2 (0.6)	48
苦情	5 (6.3)	10 (4.5)	27 (8.5)	30 (9.3)	19 (5.8)	55 (13.8)	19 (6.1)	165
文句	2 (2.5)	11 (5.0)	19 (6.0)	15 (4.7)	7 (2.1)	18 (4.5)	8 (2.6)	80

(上段は実数, 下段は100万字当たりの出現率(換算値, 小数点第二位で四捨五入))

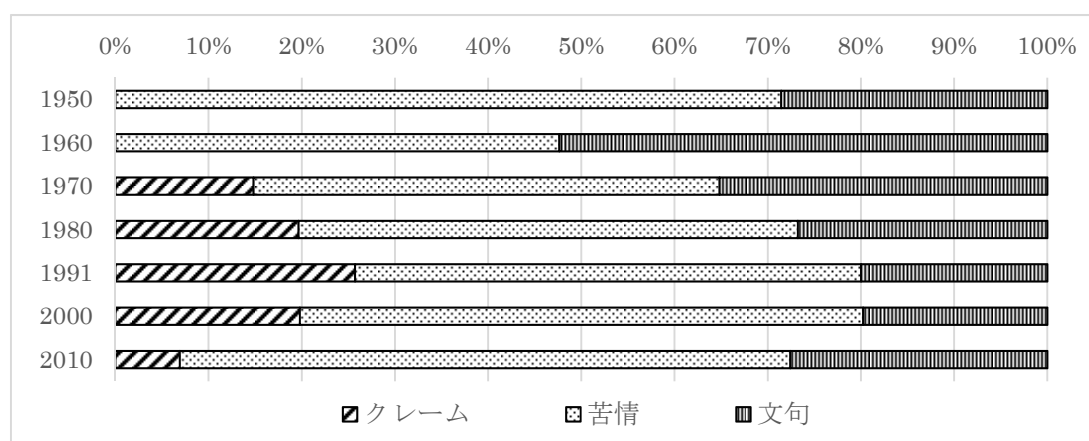


図1 通時コーパスにおける「クレーム」と類義語の出現頻度

「クレーム」が基本語化に“挫折”したことは、それが使われた紙面の範囲がいったん広がったものの結局狭まったように見えること(表3)、調査期間を通してほとんど自立用法ばかりで、結合用法すなわち造語成分としてはたらくことが広まらなかったこと(表4)

³ 「文句」の分析には、「文句なしに、うたい文句、脅し文句、決まり文句」といった慣用句と類意をなさない用例(例: ベストセラーのクリスマス・カードの文句が「ラブ」)は対象外とした。

からも、うかがうことができる(2000年の結合用法8例は、すべて同じ話題の記事におけるもの)。

表3 「クレーム」の紙面別出現頻度

	50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	計
社会			4	2	2	7	1	16
経済			2	5	1	3		11
総合				1		7	1	9
第一面			1		2			3
スポーツ				1	1			2
第二面					2			2
第三面						1		1
家庭				1				1
特集			1					1
社説					1			1
政治				1				1

表4 「クレーム」の自立用法・結合用法の頻度

用法	50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	計
自立			8	11	9	10	2	42
結合						8		6

4. “挫折”の背景・要因

用例数が十分ではないため、「クレーム」の基本語化がほんとうに“挫折”したかどうかについては、なお検証の必要がある。ここでは、それを仮説として認めただけで、その背景ないし要因を考えてみる。

4.1 〈経済〉から〈非経済〉への意味の拡大

『日本国語大辞典』(第二版)には、次のようにある。

クレーム(英 claim) ①貿易などの商品取引で、取引の相手が品質不完全、着荷不足、損傷その他の契約違反をした場合、相手方に対して損害賠償の請求や苦情を申し立てること。*第2ブラリひょうたん(1950)〈高田保〉商法「通商白書によると、クレームの四八パーセントが品質不良だとある」②一般に、商品、相手の行為や処置などに対する苦情。*鏡子の家(1959)〈三島由紀夫〉二「うちの品物はまだクレームをつけられたことがないんだから」③公的団体の立案に対する他の公的団体からの異議申し立て。

これによると、「クレーム」は、主に「商取引などの経済活動上の苦情」という意味合いで1950年代から使われているらしい。そこで、「クレーム」の自立用法の使用例を、経

済活動にかかわるもの〈経済〉とかかわらないもの〈非経済〉とに分けて集計すると、表5のようになる。

表5 「クレーム」の意味

用法	50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	計
〈経済〉			4	3	5	5		17
〈非経済〉			4	8	4	5	2	23

これを見ると、1970年以降、〈経済〉と〈非経済〉とがほぼ互角に使われ、新聞で使われはじめたころにはすでに、「クレーム」の意味（語義）は、「経済活動上の苦情」から「経済にかかわらない事柄についての苦情」へと拡大していたことがわかる。(1)は〈経済〉の、(2)は〈非経済〉の用例である。(3)は、商取引ではなく貿易全体にかかわる苦情だが、〈経済〉としてよいだろう。

- (1) また某商社は、昨年輸入したソ連材が契約した量に足りないとクレームをつけたところ、その後の木材輸入商談ではピシャリと締出しを食うという報復を受けた。
- (2) 七四パーセントに及ぶ民主主義肯定の中で、その実践について、問9、10にみられるほど多くの人々がクレームをつけるのはなぜだろう。
- (3) 第二は輸出の二割を占める欧州で、日本からの輸出急増をめぐって、欧州工作機械工業連合委員会代表者がさきごろ来日し、クレームをつけるなど貿易摩擦が持ちあがっている点である。

このような意味の拡大は、「クレーム」の基本語化にかなう変化である。すなわち、抽象名詞の外来語の基本語化は、意味がより抽象化・概括化して類義語の上位語の位置に立つことにより、その使用量を増大させるからである。しかし、「クレーム」は意味が拡大しているにもかかわらず、基本語化しなかった。それは、なぜだろうか。

4.2 マイナスの感情的意味の付着

「クレーム」の自立用法を、前後の語との共起関係という観点から分けると、表6のように、後続の動詞と結びついて動詞句を構成するものが40例中31例と圧倒的に多い。その中でも、他動詞句「クレームをつける」と自動詞句「クレームがつく」が明らかに多い（前者には受け身の例も含める）。このうち、「クレームをつける」は、1970年から91年まで使われるが、それ以降は見られない。

さらに、この「クレームをつける」は、1970年・80年あたりでは、先の用例(1)～(3)のように、〈経済〉であれ〈非経済〉であれ、「クレーム」の持ち主（仕手）が組織や集団あるいはその代表者であるためか、個人が「文句をつける」といった意味合いは感じられない。しかし、1991年の次の例(4)では、持ち主が個人⁴であるために、そのような

⁴ 個人が個人へ向けたものとして、次のような例があった。

(例) インフルエンザで1週間も休園している孫が「退屈だからビデオを借りてきて」と夫に電話で頼んできました。3本で500円とのこと。指定されたビデオを届けたのですが、あとで

ニュアンスがあるようにも感じられる。

表6 「クレーム」の用法

	50年	60年	70年	80年	91年	00年	10年	計
名詞句ほか			1	3	2	2		8
動詞句								
～をつける			4	6	2			12
～がつく			1	2	2	3		8
～を出す			1					1
～が通る			1					1
～を送る ^{注5}					2			2
～が入る						1		1
～がない						2		2
～がある						1		1
～が来る						1		1
～が相次ぐ							1	1
～がつながる							1	1
中止用法					1			1

(4) 今回の組閣は、宮沢新総裁が決まった十月二十七日から、臨時国会初日の首相指名の五日まで「間(ま)がありすぎる」(斎藤氏)ことが特徴だが、もうひとつ、閣僚人事をめぐるヤマのような情報の中に、宮沢氏の肉声がないことだ。すでに、渡辺美智雄氏の副総理兼外相、羽田孜氏の蔵相起用が内定。他の主要閣僚ポストも党内各派への割り振りと派閥推薦閣僚候補をあてはめる作業が進んでいるが、調整の中で、宮沢氏が拒否したり、クレームをつけたなどのうわさもない。

こうした見方は、もちろん、「クレームをつける」が、「文句をつける」「言いがかりをつける」「いちゃもんをつける」などと同じ「～をつける」という形式を持ち、そのために、これらが持っているマイナスの感情的意味を付着させてしまったのではないかと解釈できる、ということである。「クレームをつける」も、70年・80年あたりはまだそうしたマイナス語感の付着はなかったのかもしれないが、91年にはそうした傾向が現れつつあったものと思われる。

もしそうだとすると、こうしたマイナスの感情的意味は、当然、「クレーム」という名詞そのものにも付着することになるだろう。以下の例で、「厳しいクレーム」「激しいクレーム」という表現は、そうしたことを間接的に示しているように思われる。

孫からクレームがきました。「バンビと言ったのに、じいちゃん、ゾンビを借りてきた」(大分市・60歳) [2000年3月5日総合]

⁵ 「請求書を送る」の例。

(例) エネルギー側は今年一月三十日付で契約代金全額支払いを求める請求書(クレーム)をパ社に送っているが、未払いのまま。[1991年5月5日第一面]

- (5) これに先輩の政治記者から厳しいクレームが相次いだことを紹介した。当時から“変人”扱いだった小泉さんにも厳しかったが、何ととってもベスト3の鳩山、船田、谷垣3氏には「記者まで一緒に素人では困る」「彼らに激動期を乗り切る資質があるとは思えない」など、要するに「頼りない」という批評が相次いだ。
- (6) 学校や保育園など子どもを預かる施設が気に掛けるのが、親との関係だ。親の激しいクレームにつながることもある。

4.3 他の動詞句やサ変動詞化の可能性

要するに、「クレーム」は、〈経済〉から〈非経済〉へと意味を拡大し、それに伴って使用量を増やして基本語化の方向に向かいかけたが、その多くが「クレームをつける」という動詞句であったために、「文句をつける」などが持つマイナスの感情的意味を付着させてしまい、より抽象的な意味を持つ（類義語の）上位語として基本語化することができなくなってしまったのではないかと、ということである。

では、なぜ、「クレーム」の動詞句に「～をつける」という形式が選ばれたのだろうか。もし、「クレームを言う」など別の動詞との結びつきを採用していたら、あるいはまた、「クレームする」というサ変動詞を成立させていたら、「クレーム」は基本語化していたかもしれない。このうち、サ変動詞については、BCCWJを検索すると26例⁶が得られ、そのほとんどが特許関係の専門語ないしジャーゴンとして使われている。前後関係は明らかではないが、「クレームする」が専門分野で使われてしまえば、それが一般語として採用される可能性は少なくなるだろう。

5. “挫折語”からみる基本語化

以上、本発表では、外来語「クレーム」が基本語化に“挫折”した要因・背景として、「クレームをつける」という動詞句が、「文句をつける」などと共起動詞を同じくする形式であったことから、それらが持つマイナスの感情的意味を付着させてしまい、その結果、「クレーム」そのものにも同じ感情的意味が付着してしまったために、より抽象的で広い意味を持つ（類義語の）上位語として基本語化することができなかつたのではないかと推測した。もちろん、これは仮説であり、今後、別に検証していく必要がある。ただ、そうではあっても、基本語化に“挫折”した外来語が、基本語化の条件や要因を検討するうえで、有用な手がかりを提供してくれることは間違いないように思われる。

付 記

本研究は、文部科学省科学研究費補助金「近現代日本語彙における『基本語化』現象の記述と類型化」（2014年度～2016年度，基盤研究C，研究代表者：金愛蘭）および国立国語研究所「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（基幹型プロジェクト，2009年

⁶ 今回の新聞データでは出現しなかったが、国立国語研究所のBCCWJ（検索ツールは、中納言を利用）にはサ変動詞の用例があった。なお、「クレーム」という表記をするものも5例あった。
 (例) 既に述べたように、多項制のメリットは1つの発明を多面的な観点からクレームして保護できるところにある。#明細書の作成にあたっては、このことを十分に活用すべきであろう。

[LBs5_00009, 竹田和彦 (2004) 『特許の知識』ダイヤモンド社]

度～2015年度予定, 研究代表者: 相澤正夫) による研究成果の一部である。

文 献

- 石井正彦 (2013) 「和語・漢語・外来語—基本語彙に見る攻防—」『日本語学』32-11
- 金愛蘭 (2006a) 「外来語『トラブル』の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2巻2号
- 金愛蘭 (2006b) 「新聞の基本外来語『ケース』の意味・用法—類義語『事例』『例』『場合』との比較—」『計量国語学』25巻4号
- 金愛蘭 (2011) 『20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』『阪大日本語研究』別冊3号
- 金愛蘭 (2013) 「外来語動名詞「チェック」の基本語化—通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から—」相澤正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう
- 金愛蘭 (2015) 「基本語彙構造における外来語の進出領域」斎藤倫明・石井正彦『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』おうふう
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書
- 田中牧郎 (2013) 『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店
- 宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究 第3集』国立国語研究所

関連 URL

現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言 1.1.0 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>